

**21** 女医丸茂むねの一生と明治期の女子医学生達の教育

志村 俊郎<sup>1)</sup>, 唐澤 信安<sup>1)</sup>, 殿崎 正明<sup>1)</sup>  
山本 鼎<sup>1)</sup>, 幸野 健<sup>1)</sup>, 寺本 明<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>日本医科大学 医史学教育研究会, <sup>2)</sup>日本医科大学 脳神経外科学教室

明治期の女医の数は、三崎等の報告（日本医史学雑誌第54巻第3号）によると、134人でその内訳は、済生学舎61人、女子医学研修会6人、日本医学校56名、東京医学校11名である。発表者らは、第110回本学会にて「済生学舎講師石川清忠と女子医学生の教育」にて女子医学生達の苦難な勉学への道を報告した。今回は、丸茂むねの一生から再び明治期の女子医学生の教育を考える。

日本で7番目の女医である丸茂（深萱）むねは、明治2年9月1日深萱英次の長女として岐阜県土肥郡高山村に生まれる。志を立て、明治20年17歳で上京し、済生学舎に入学した。むねは、明治23年に卒業して医術開業後期試験に合格し、日本で7番目の女医となる（登録年月日明治24年7月）。むねは、登録後に東京下谷区で開業した。その後、かねてより学舎内でロマンの噂が高かった済生学舎の丸茂文良講師と結婚する。むねは、丸茂文良が明治29年5月30日に、我が国初の「X線実験臨床講義」を行った時の助手をつとめた。明治36年8月31日、済生学舎が廃校となると、夫と共に丸茂病院で旧済生学舎の後期生の救済の為「温習会」を開き内助の功を果たす。その後、丸茂むねは、娘文を育て、実地医療を行わなかったが、影で文良を支え、内助の功を果たした良妻賢母であった。娘文の夫は、中村猛で日本医専にて細菌学の講義を行った。むねは、昭和19年9月8日76歳にて亡くなる。その他、むねに関する興味ある事実を述べる。むねと樋口一葉との関係は、一葉の血縁である叔父の樋口幸作がハンセン病であり、一葉は、夫文良に感染に関して相談しており、文良死後もむねにより其の病について聞かされていたという。この幸作事件が一葉に最も短期間に傑れた小説を書かせた要素とも考えられている。また、むねは、東京女医学校創立者吉岡弥生の済生学舎の2年先輩にあたり吉岡弥生伝の資料によれば親交があり、その資料には、丸茂文良との済生学舎におけるロマンスの浮名が記載されている。

**まとめ**

女医丸茂むねの一生より、明治期における当時の女医教育について報告する。